

ニッポン ドクター和の 臨終凶巻



「この2、3日はずっとあなたのことを考えていました。どうしてでしょうね。そういえば死ぬときのことなんか、呑気に話してていましたね。野際さん、あなたのいらっしやらないこの世界は、寂しいです……」

これは6月13日に肺腺がんため81歳で亡くなった野際陽子さんに宛てた友人の黒柳徹子さんの手紙の一部。飾らない徹子さんらしい素直な文章にジンとききました。

この2、3日はずっとあなたのことを考えていました―この感覚がとてもわかる気がします。私

11 野際陽子



長尾和宏（ながお・かずひろ） 医学博士。東京医科大学第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で「人を知る」総合診療を目的とした在宅医療まで「人を診る」著「薬のやめどき」「痛くない死に方」は、いずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。

はあの世とか靈魂とか、全く信じていません。だけど、大切な人が亡くなる直前の、別れの予感のような感覚は確かにあります。在宅患者さんのお付き合いにおいてこそ。医師の経験則とはまた別の意味で、お別れの直前には、不

思議とその患者さんのことをずっと考えていたりします。あなたのいらっしやらないこの世界は、寂しい―この気持ちも分かるような年になってきました。生きることは、お別れを重ねていくという事。私は一昨年、母親を交通事故で亡くしました。しかし、いまだ遺品整理が終わらない。母の不在を確認する作業がともつらく、寂しいのです。

さて、野際さんの死の報道を受け、どのワイドショーでも「先月までドラマに出ていて、あんなにお元氣そうだったのに亡くなったなんて信じられない！」という旨のコメントを、皆さんが異口同音に言っていましたね。

「がんが進行していた人が、死ぬ1カ月前まで元気に仕事をこなしていたことが信じられない！」と言いたいわけですね。

しかし野際さんは、奇跡のがん患者だったわけでも、ましてや突然死したわけでもありません。医師から言わせれば、がんで死ぬとは「そういうもの」なのです。急激に体力が低下するのは最期の1カ月くらい。在宅患者さんの中には亡くなる前日まで元気にごはんを食べ、普通に会話をし、歩いてトイレに行ける人もいます。

だからこそ、がんの人は可能であれば働いていたほうがいいし、自分らしい普通の生活を送っていたほうが、気力も保て、ギリギリまで元氣でいられるのです。

まるで事故か何かで突然死されたような言い方でした。つまり

野際さんが肺腺がんを患ったのは3年前。娘さんのコメントによれば、2度の手術と3度の抗がん剤治療の「仕事をしながらの壮絶な3年間」であったとのこと。

しかし、そんなことはおくびにも出さず、女優として最後まで輝いておられました。がんであっても美しく、生涯現役でいられることを身をもって教えてくれたと思います。

両立させた「がんと女優」

仕事と闘病の両立をあきらめる時代では、もはやありません。